

「無」と「空」の関連表現と広告表現における“fill the void”の位置付け

—John Cage 「4 分 33 秒」の世界観との接点—

有 光 奈 美

I. はじめに

II. 辞書における「無」と「空」

1. 辞書で「無」はどのようにとらえられているか
2. 辞書で「空」はどのようにとらえられているか

III. 「無」と「空」の関連表現

1. 日本語と英語の接頭辞としての「無」と「空」
2. その他の否定的接辞との相違点

IV. 非言語関連表現としての「無」と「空」

1. 禅における「無」と「空」
2. 音楽における関連表現

V. 英語雑誌広告における具体事例

1. 広告における命令文の使用とは
2. “fill the void” が意味するものの位置付け

VI. おわりに

参考文献

I. はじめに

本稿は、日本語と英語の「無」「空」に関連する表現について、具体的な言語事例や音楽作品に見られる世界観を取り上げ、認知言語学の視点から論じる。「無」と「空」は禅にも見られる思想であるが、日本語と英語の日常言語の中でも使用されている。普段、何気なく使い分けている「無」と「空」、そして、その関連表現であるが、日本語と英語においてその背後にどのような意味のメカニズムが存在しているのかということについて、十分な比較検討は十分にされていない。なぜ、「何もない」のではなく「何かがある」として事態を認知しがちであるのか、日本語と英語の言語表現だけではなく、John Cage の「4 分 33 秒」等の音楽作品の持つ性質と照らしていくことによって分析していく。John Cage は「有」と「無」ということにも代表される二項対立的なものの見方に対して異議を唱え、それを音楽作品という形を通して世に表現した。認知言語学は従来の静的な言語学が扱うことのできなかった言語の使用のダイナミックな側面を、例外を含めた生きた形でとらえようと試みる視点である。本稿は、「無」「空」に関連する表現を日英語で照らした後、特に英語広告表現の中から“fill the void”という表現を取り上げ、その位置付けを同定する。「無」と「空」、そして存在に関する具体的な言語事例の分析を通し、二項対立的視点を超えた世界観を構成している人間の認知基盤の解明の一部に迫ることができることを指摘していく。

II. 辞書における「無」と「空」

1. 辞書で「無」はどのようにとらえられているか

まず、日本語と英語の辞書において、「無」と「空」がそれぞれどのようにとらえられているか概観する。「無」は、「有」に対立する要素であり、広辞苑（第5版/第6版）によれば、以下のように説かれている。

- ① ⑦ないこと。存在しないこと。欠けていること。④否定・禁止を表す助辞。
- ② [哲] ⑦或るものがないこと。特定存在の欠如。何らかの有の否定。④いかなる有でもないこと。存在一般の欠如。一切有の否定。⑦万有を生みだし、万有の根源となるもの、有と無の対立を絶したものとされ、インド思想に見られ、老子などに説かれ、西田哲学において独自の意味を与えられた。絶対無。↔有（ゆう・う）

本稿では、こうした「無」を英語と照らしながら分析していく。日本語の「無」を表す英語について、研究社新和英大辞典（第5版）では、以下のように説かれている。

- (1) nothing; naught; nil; nihility; nullity; zero
- (2) no (---), lack (absence) (of ---); without (---); -free; -less; a-

「無」を用いた表現の英語対応例としては、government without parliament（無議会政治）、a daimyo (feudal lord) without a castle（無城の大名）、duty-free（無税）、aperiodic（無周期の）といったものが挙げられている。これらの相違点を「空」と照らしていく。

2. 辞書で「空」はどのようにとらえられているか

「空」もまた「有」に対立する要素の一つであり、広辞苑（第6版）には、以下のように説かれている。

- ① そら。地面から上に何も無い所。「～を切る」「～を掴む」
- ② [仏]もろもろの事物は縁起によって成り立っており、永遠不変の固定的実態がないということ。特に般若経典や中観派によって主張され、大乘仏教の根本原理とされる。「色即是～」↔有（う）
- ③ 仏教で五大の一つ。
- ④ 航空に関すること。「～輸」「～撮」

上記の広辞苑（第6版）では、広辞苑（第5版）で挙げられていた以下の3つの項目は、削除されている。

- ⑤ から。あいていること。むなしいこと。「空白・空虚」
- ⑥ 事実でないこと。よりどころのないこと「架空・空想」

⑦ むだであること。「空費」

本稿では、こうした「空」を英語と照らしながら分析していく。

「空」について、研究社新和英大辞典（第5版）では、以下のように説かれている。

- (3) the air; the sky; the heavens; space; the void; the firmament
- (4) emptiness, nothingness; vacancy; a vacuum; an empty feeling; a feeling of emptiness; meaninglessness; pointlessness
- (5) vanity of vanities; come to nothing (nought); be (prove) fruitless (in vain); go up in smoke; be wasted; All efforts to avoid war proved in vain; All is vanity.
- (6) a nonempty subset of a set A

「空中」、「空間」といった物理的描写のみで価値的要素が少ないものから、「虚しいこと」、「無意味」、「無駄」といった否定的価値を持つ用例が存在していることがわかる。

Ⅲ. 「無」と「空」の関連表現

1. 日本語と英語の接頭辞としての「無」と「空」

日本語では、「不」、「非」、「未」、「無」等、英語では、un- in-, non-, dis- 等の否定接頭辞を用いて、語の打ち消しを行い、否定を表現することができる。この場合も、例文 a と b の間には、肯定と否定の対比が存在している。

- (7) a. この食品は有害だ。 b. この食品は無害だ。 c. この食品は有害ではない。
d. This food is harmful. e. This food is harmless. f. This food is not harmful.
- (8) a. この計画は決定している。 b. この計画は未決定だ。 c. この計画は決定していない。

例文 b と c は、ほぼ言い換え可能である。否定接頭辞の使用については、「～ない」の使用と照らし合わせ、否定の強弱に差があることが指摘されている。（山梨 2000: 134-135）

- (9) a. 彼女は幸せだ。 b. 彼女は不幸せだ。 c. 彼女は幸せではない。

(9c) よりも (9b) の方が否定の度合いが強い。(7) で (7b) と (7c) はほぼ言い換え可能であったが、(9b) と (9c) がほぼ言い換え可能であるとはいえない。ここに「有・無」と「幸せ・不幸せ」というそれぞれの対比に見られる性質の違いが存在している。

「無害」というのであれば、harmless; innocent; innoxious; innocuous; inoffensive; nonpoisonous; nontoxic といった表現が可能であるが、類似表現を作るために「空」や emptiness の概念を持ち込むことはできない。「空」や emptiness の概念は、否定接頭辞としては生産性に劣っているようである。

また、「空費」「空談（無駄話）」のように否定的価値を伴うことがあるのも特徴である。真実のないことや実質のないことを表すことができる。「空威張り」「空約束」「空元気」「空手形」「空返事」「空咳」のような事例である。これらを「無」で代替させることはできない。これらの事例においては、「威張り」や「約束」や「元気」が全くないというわけではなく、偽物の「威張り」や「約束」や「元気」は存在しているのである。「開けて見たら空だった」というような「空」の潜在的に持つ容器性、蓋を持ちうる様子、外部を構成する外見を有する様子といった特徴が、そうした用例を支えていると考えられる。

2. その他の否定的接辞と「空」の相違点

日本語の「不」、「非」、「未」、「無」など、英語の *un-*, *in-*, *non-*, *dis-* といった否定接頭辞でなくとも、擬似的な否定の意味を表す接辞が存在している。英語の具体例は、Steven (2002) に詳しい。-ful/ -less (*harmful/ harmless*), -free (*sugar-free*), -let, -like (～に似た/本物ではない) といった接尾辞が存在している。

in-/ ex- (in/out), inter-/intra-, extra-, contra-, ant-, de-, an-, re-, ab-, ob-, pre-/post-, retro-, prim-, pro-, mis-, down-, over- (super-, ultra-), sub-, under-, by-, semi-, half-, pseudor-, mal- など、内外、前後、先後、上下、半分、反対、逆、偽、悪い、といった概念が含まれることがあり、単なる空間的な内外を超えた価値的で非明示的な否定性が存在していることがある。

一連の否定性を有する概念の中に「無/ *nothingness*」や「空/ *emptiness*」を入れることができると考えている。「空」は文字通り空間認知を基盤としており、そこから否定的価値を表現するに至っている。このことはモノが「有る」「無い」という認識とも関連しているが、「空」においては、ある特定の場としての空間が必要であることが「無」以上に前提になっていると考えられる。

一方で、「無」は存在や対象そのものを否定することができ、ある特定の場としての空間が必要であることが前提にはなっていないようである。そのことを以下の事例で明らかにできる。

- (10) a. グラスにワインが入っている。
b. グラスにはワインが入っていない。
c. グラスは空である。
- (11) a. There is wine in the glass.
b. There is no wine in the glass
c. The glass is empty.

上記のような場合、(b)と(c)は同じような状況を表現していると考えられなくもない。しかし、次のような対比では同じにはなりえない。

- (12) a. 冷蔵庫の中にワインのボトルがある。
b. 冷蔵庫の中にワインのボトルが無い。

- c. 冷蔵庫の中は空だ。
- (13) a. There is a bottle of wine in the refrigerator.
b. There is no bottle of wine in the refrigerator.
c. There is nothing/???an emptiness in the refrigerator.

こうした場面を表現するとき、「冷蔵庫の中」という特定の空間としての場を与えれば、「空」や *emptiness* を用いることができるかと言うと、「(ワインのボトルが) 無いこと」とは同じ意味にはならない。日本語のように「空」が用いることができたとしても、それは「ワインのボトルが」無いということは表現できない。

また、英語であれば、*emptiness* を用いることは奇異であり、*nothing* を用いることになる。日本語の「空」は上で見たとおりだが、*empty* は主に「(容器など) 空の、空虚の、(場所が) 空いている、人の住んでいない」という意味で、研究社新英和大辞典(第6版)では、以下のように紹介されている。

- (14) an empty bottle 空きビン、
(15) smoke on an empty stomach すきっ腹にタバコを吸う
(16) empty stomachs 飢えた人々
(17) an empty cupboard からの食器棚、食物の欠乏
(18) return/ come away/ go away empty から手で虚しく帰る
(19) an empty street 人通りのない街路
(20) an empty house 空き家、家具の無い家
(21) an empty ship/ wagon 積荷の無い、からの
(22) a room empty of furniture 家具の無い部屋
(23) These worlds have become empty of meaning. 無意味になっている
(24) empty words/ phrases 無意味な言葉
(25) empty promise/ threat から約束、こけ脅し
(26) empty pleasures 空虚な快樂
(27) Life is but an empty dream. 人生はただ虚しい夢に過ぎない
(28) feel empty 空腹を覚える

動詞の場合には、以下のような用例が存在している。

- (29) empty one's glass 容器などをからにする
(30) empty a bucket of its water グラスを飲み干す
(31) empty a house 家から家具を取り除く、空き家にする
(32) empty a pocket of its contents ポケットから物を取り出してからにする
(33) The rain emptied the street. 雨で街路には人通りが絶えた。
(34) Rumors emptied the town of its population. 流言で全住民がいなくなった。
(35) empty the water out of from one bucket into another 水を他のバケツへ移す
(36) empty a bag on the table 袋の中身をテーブルの上へあける

(37) The river empties itself into the Sea of Japan その川は日本海にそそぐ

(38) The town is emptying. 町は人気が無くなりつつある

なお、emptiness は、「1. 喪失感、虚しさ、寂寥感、2. から、空虚、人が住んでいないこと、3. (頭の) からっぽ、無知、無意味、4. 空所、真空、5. 空腹、6. (仏教) 涅槃」として挙げられている。他の類義語と比べた場合、empty は empty bottle のように中に何も入っていないことを指したり、言葉や行動などが空虚なことを指したりする。

vacant は「The house is vacant. (その家は空き家だ)」のように、場所や空間において普通中にあるはずのものがいないということである。「1. (部屋・座席など) 空いている、(土地・家屋など) 借り手のない、住み手のない、空いている、欠員になっている、空席の、空位の、人の住んでいない、2. (心・頭が) 空虚な、からっぽな、間抜けな、3. からの、空虚の、空の、4. あいている、仕事をしていない、用のない、暇な、5. 活気のない、ひっそりとした」等が挙げられている。名詞でも類似の意味合いが挙げられる。「1. (地位などの) あき、空位、空席、欠員、2. 空き地、空室、3. 隙間、4. こころのうつろ、ぼんやりしていること、放心状態、5. 空虚、空間、6. 空格子 (結晶)、7. 暇、余暇、無為の時間、仕事がないこと」等である。これらの「暇、余暇、無為の時間、仕事がないこと」については、emptiness, void, blank において類例を見ることができない。

blank は、「a blank look (ポカンとした顔)」のように、顔つきに表情がないことを表現できる。また、blank は、a blank tape のように、(紙が) 文字・印が描かれていない、テープ等が録音されていないことである。blank について、研究社新英和大辞典 (第6版) では、以下のように説かれている。「1. 白紙の、2. からの、がらんとした、何もない、空虚な、3. 装飾がない、あるべきものを欠いた、4. 空虚な、無味乾燥な、何事もない、成果のない、虚しい、5. ぼんやりした、ぽかんとした、生気のない、当惑して物が言えない、黙り込んだ、6. 全くの、純然たる、7. 某、忌々しい、ばかばかしい」等である。名詞、動詞も存在している。上記の「6. 全くの、純然たる、7. 某(～さんのように人を指す)、忌々しい、ばかばかしい」等の用例は、empty, vacant, void 等に類例が見られない。

void は、「a proposal wholly void of sense (全く意味のない提案)」のように、「～が全くない」という格式ばった語である。名詞として主に、空間、空洞、真空、くぼみ、虚空、隙間、間隙、空隙、空所、孔隙、空虚感、むなしさ、喪失感、形容詞として主に、欠けた、空の、何もない、中空の、空虚な、うつろな、無効の、役立たずの、持ち主のない、他動詞として主に、無効にする、取り消す、放出する等の意味を挙げることができる。また、「null and void (法的に無効とする)」というフレーズも存在している。

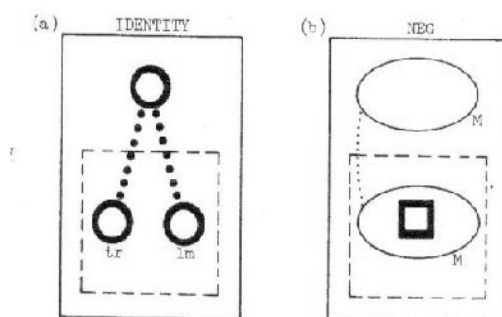
null 自体も、「名詞として：ゼロ、空値、形容詞として：無価値の、無効な、他動詞として：無効にする」といった意味を持っており、null and void は、「The card is null and void and won't be accepted anywhere.」(そのカードは無効なので、使えません) のように用いられる。empty よりも価値的な側面が出現しており、単なる entity とし

ての物体が空間に無いのではなく、価値的な対象としての何かが無いことを表しているのが **void** である可能性がある。

void について、研究社新英和大辞典（第 6 版）では、以下のように説かれている。形容詞としては「1. 法的効力のない、無効の、2. 無益な、役に立たない、3. 空虚な、からな、空っぽの、4. 住む人のない、借り手のない、5. ～がない、欠けた、6. (トランプで) ～が一枚もない」などがある。名詞としては「1. 空虚の感じ、虚しさ、物足りなさ、2. 空白、空位、空所、空間、真空、3. 隙間、割れ目、4. トランプのブリッジにおけるボイド (手札の中に特定のスーツの札が一枚もないこと)」が挙げられる。動詞としては「無効にする、取り消す」等である。トランプのブリッジにおけるボイドの意味では、**have a void in spades** で、スペードが初めから一枚もないということの意味し、「**void** を持つ」すなわち、「ないものを持つ」という表現が定型化している。

void は **vacant/vacancy** と重なりあう部分が多いようだが、**void** の方が固く形式張っており、法的場面で用いることができる。無効であることを表すのには **void** の方が適切である。

Langacker (1991) は、**negation** について、下記のような認知図式で説明を行っている。



With respect to a background conception in which some entity occupies a mental space, *M*, it portrays as actual a situation in which that entity fails to appear in *M*. The missing entity is a process in the case of clausal negation, but that is not the only possibility; for example absent from *M* is a thing. By the analysis adopted here, **NEG** profiles the missing entity, as opposed to the relationship it bears to *M*. The result of combining **no** with *cat* is therefore a nominal, not a stative relation (such as *absent* or *missing*), and the processual nature of the finite clause is unaltered by **not**. This suggests that **NEG** should be considered an epistemic predication, or at least a close cousin --- recall that the hallmark of such a predication is that it profiles the grounded entity rather than the grounded relationship. (Langacker, 1991: 134)

ある entity がメンタルスペースの中に「ある」という状況を考えれば、その一方で、「ない」という状況を考えることもできる。その「存在しない entity」については、「節」形式の否定ということだけには限らず、「モノ」であることも想定できる。「否定する」ということは、その「存在しない entity」に焦点を当てるということである。つまり、「存在している entity」に対立するものとしての「存在しない entity」が考えられるということである。もし、それを「猫」が「いないこと」(*no cat*) というように結び付ければ、名詞句を構成することになる。Langacker は否定を認識的言述 (epistemic predication) と位置づけている。

否定を空間認知からとらえようとしている試みであると考えられるが、このことは、単なる記号操作的演算的な not による否定ではとらえきれない否定の本質の一部を描写できている。単なる記号操作的演算的な not と、空間認知的な否定 (いわゆる「無」や「空」) による否定のどちらがより根源的本質的であるのかという問いについては、現在答えがないが、子供の認知発達プロセスや日常生活における基本的否定性は、あるモノ (entity) がその場所に「ない」という認識から始まっており、それがより抽象的な否定へと拡張しているのではないかと考えられる。

Langacker のこの視座を導入することによって、emptiness と void の相違点にも気づきが与えられる。Langacker の指摘は、普段われわれが忘れがちである否定の基盤の一部について、空間認知の導入による再認識を促していると考えられる。

IV. 非言語関連表現としての「無」と「空」

1. 禅における「無」と「空」

禅において、鈴木大拙は以下のように説いている。

今日、科学者はしきりに「客観的証明」ということを口にしします。それが水なら、科学者は実験によって、いわゆる「客観的」に水だと証明しようとしします。いわゆると言ったのは、主観を離れた客観なるものはないからです。客観には常に主観が含まれる。科学者が、いくら客観的で、公平で、没個性的であろうとつとめても、彼が彼である限り、そこに主観が入り込むからです。それはどうにもなりません。(2006:12)

こうした視点は認知言語学的である。禅では身の回りの環境全てを自由な心で、あるがままに感じるということが大切であると説く。禅に「無門関」という概念があるが、枠にとらわれず、自由な境地で門から入ることの重要性を表している。また、禅では大きな○を描いただけのものを「一円相」と言い、それは画でもあり、書でもあると捉えることができるが、言葉では伝えることのできない悟りの境地や絶対的な教えを表現している。文字ではなく円でしか表せないということだとも説明されている (ひろちさや 2008: 44) さらに、「心頭滅却すれば火も自ら (おのずから) 涼し」という禅僧のことばの解釈として、禅の修行では、「寒いときには自分が「寒」になり、暑いときには自分が「暑」になれ」と言われるが、寒さや暑さに対して抵抗するのはなく、「分別」や「とらわれ」をなくして自分とどうかしなければならぬという視

点を紹介している。(ibid: 57)

この「とらわれない」という視点が、否定性とどのように関連しているのか、禅における「空」を見ることで明らかになってくる。ひろちさやは、「真空不空(しんくうふくう)」という概念について、以下のように紹介している。

仏教では実体のあるものを「色(しき)」と言います。一方、物事は現象に過ぎず実体はないという考え方を「空」といいます。私たち現代人はついどちらかに偏って考えてしまいます。「色」にとらわれて、物質的、経済的な欲求のために一生懸命働いてしまう。それではダメだと「空」になると、すべては無常だからと、人生を投げ出そうとする。確かにこの世界の存在はすべて「空」です。しかし、「色」と「空」は決して対立しているわけではありません。「空」であるこの世では、春に花が咲き、秋に木々の葉が紅葉するという「色」を見ることができます。「色」はそのまま「空」であり、「空」はそのまま「色」なのです。これを「真空妙有(しんくうみょうう)」ということもあります。「真空」は決して「虚無(こむ)」ではなく、あらゆるものを成り立たせる「妙有」なのです。中国明の時代に書かれた随筆集「菜根譚(さいこんたん)」にあるこの言葉は、私たちに「本当の空は何もないことではない」と説いています。(ibid: 61)

本当の空は何もないことではない、ということを読みかえると、空とはすなわち、そのままに対象をとらえることであると言えそうである。先に挙げたように、人間は完全に主観から離れることはできないが、そのことを認めた上で、とらわれることなく、対象を受けとめることが、「空」を認識するというのではないかと考えられる。

日常言語の「無」や「空」の扱いは、空間的非存在や価値的否定性を表すことに留まっているようであるが、人間による世界の認識という観点から考えると、「無」や「空」のとらえかたというのは、何かモノ(entity)が「有る」以上に、世界の見方そのものであり、実は単なる「有る」「無し」の二項対立を超えた上位概念に気づく視点が必要なのではないかということが示唆される。

「有る」「無し」を統合して全体を構成しているような、とらわれのない視点である。それがより上位の「有る」であり同時に「空」なのではないかと考える。禅のこうした視点は、日常言語使用における日・英語の「無」や「空」とは重なりきらない部分もあるが、世界を把握し認識し描写する方法として、認知言語学の主観性や使用基盤モデルといったものと矛盾しない視点であると考えられる。「無」も「空」もこうした個人的な体験の積み重ねによって習得される概念なのである。

2. 音楽における関連表現

音楽における「無」と「空」として、二つの事例を挙げることができる。一つは、ドヴォルジャーク作、交響曲第9番ホ短調作品95「新世界から」の第二楽章の105小節から110小節までの部分である。(全音楽譜出版社1956: 82-83)

100 rit. E. Meno mosso, Tempo 1. J. sz.

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

428

429

430

431

432

433

434

435

436

437

438

439

440

441

442

443

444

445

446

447

448

449

450

451

452

453

454

455

456

457

458

459

460

461

462

463

464

465

466

467

468

469

470

471

472

473

474

475

476

477

478

479

480

481

482

483

484

485

486

487

488

489

490

491

492

493

494

495

496

497

498

499

500

501

502

503

504

505

506

507

508

509

510

511

512

513

514

515

516

517

518

519

520

521

522

523

524

525

526

527

528

529

530

531

532

533

534

535

536

537

538

539

540

541

542

543

544

545

546

547

548

549

550

551

552

553

554

555

556

557

558

559

560

561

562

563

564

565

566

567

568

569

570

571

572

573

574

575

576

577

578

579

580

581

582

583

584

585

586

587

588

589

590

591

592

593

594

595

596

597

598

599

600

601

602

603

604

605

606

607

608

609

610

611

612

613

614

615

616

617

618

619

620

621

622

623

624

625

626

627

628

629

630

631

632

633

634

635

636

637

638

639

640

641

642

643

644

645

646

647

648

649

650

651

652

653

654

655

656

657

658

659

660

661

662

663

664

665

666

667

668

669

670

671

672

673

674

675

676

677

678

679

680

681

682

683

684

685

686

687

688

689

690

691

692

693

694

695

696

697

698

699

700

701

702

703

704

705

706

707

708

709

710

711

712

713

714

715

716

717

718

719

720

721

722

723

724

725

726

727

728

729

730

731

732

733

734

735

736

737

738

739

740

741

742

743

744

745

746

747

748

749

750

751

752

753

754

755

756

757

758

759

760

761

762

763

764

765

766

767

768

769

770

771

772

773

774

775

776

777

778

779

780

781

782

783

784

785

786

787

788

789

790

791

792

793

794

795

796

797

798

799

800

801

802

803

804

805

806

807

808

809

810

811

812

813

814

815

816

817

818

819

820

821

822

823

824

825

826

827

828

829

830

831

832

833

834

835

836

837

838

839

840

841

842

843

844

845

846

847

848

849

850

851

852

853

854

855

856

857

858

859

860

861

862

863

864

865

866

867

868

869

870

871

872

873

874

875

876

877

878

879

880

881

882

883

884

885

886

887

888

889

890

891

892

893

894

895

896

897

898

899

900

901

902

903

904

905

906

907

908

909

910

911

912

913

914

915

916

917

918

919

920

921

922

923

924

925

926

927

928

929

930

931

932

933

934

935

936

937

938

939

940

941

942

943

944

945

946

947

948

949

950

951

952

953

954

955

956

957

958

959

960

961

962

963

964

965

966

967

968

969

970

971

972

973

974

975

976

977

978

979

980

981

982

983

984

985

986

987

988

989

990

991

992

993

994

995

996

997

998

999

1000

Cor. In G. sempre più diminuendo
a Violini con sordini.

Viol. a Violini con sordini.

a Violoncelli con sordini.

a Contrabbassi.

a Basso.

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

428

429

430

431

432

433

434

435

436

437

438

439

440

441

442

443

444

445

446

447

448

449

450

451

452

453

454

455

456

457

458

459

460

461

462

463

464

465

466

467

468

469

470

471

472

473

474

475

476

477

478

479

480

481

482

483

484

485

486

487

488

489

490

491

492

493

494

495

496

497

498

499

500

501

502

503

504

505

506

507

508

509

510

511

512

513

514

515

516

517

518

519

520

521

522

523

524

525

526

527

528

529

530

531

532

533

534

535

536

537

538

539

540

541

542

543

544

545

546

547

548

549

550

551

552

553

554

はじめ予測されており、そこにテーマであるメロディが小さな音でゆっくりと入ってくるはずなのである。しかし、音楽はこの 105 小節から 110 小節までの間に 3 回のフェルマータを持ち、そのたびに音楽は停止する。そのため聞き手の側はどうしたことかと目が覚めるような思いがする。ここには、あるだろうと思ったところに何もないという「空」の妙がある。そして、その空間が空くことによって、単に再現されるだけではないテーマの印象が深められている。

こうした間や空間とは、音楽が「音を鳴らすこと」だけではなく「音を鳴らすことと、音を鳴らさないこと」によって、構成されているのだという当たり前のことを再確認させてくれる。言語学（語用論）では、隣接ペアという考え方があり、話し手が「こんにちは」とあいさつした場合、一般的には、聞き手が「こんにちは」と返すことを社会的には期待している。また、「どう、最近は？」と聞いた場合に、「ぼちぼちですよ」というように答えるのは、そこにたいした意味がなくとも何らかの返事をするのが社会的に求められているからである。「どう、最近は？」と尋ねた方も、真に詳細について聞いてほしいというような場合よりも、たまたま道端で遭遇し、無言で通り過ぎるということを選択するよりも社会的に無難な程度の声をかけておくときの選択肢の一つに過ぎないことは話し手と聞き手の双方が熟知している儀礼的場面として日常生活の中でまある。答える側も「ぼちぼちですよ」と言う程度で十分な場合が往々にしてあり、かえって求められてもいないのに詳細に自分の現状を話し始めるのが奇妙に感じられる場合もある。そこでは、何らかの社会的に期待されているような適度な返答をすることそのものが求められているのであり、それ以上のことが求められているのではない。求められている以上のものを返答したり、あるいは、一般に期待されている最低限の返答が引き続いて起こらずに沈黙や無視が出現したりすると、そこには Grice (1975) の Maxims に対する違反が生まれ、自然なコミュニケーションが成立した状態ではなくなってくる。

こうした adjacency pairs について、以下のような例を挙げることができる。(Yule, 2000:76-77)

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| (39) Anna: Hello. | Bill: Hi. |
| (40) Anna: How are you? | Bill: Fine. |
| (41) Anna: See ya! | Bill: Bye. |
| (42) First Part | Second Part |
| A: What's up? | B: Nothin' much. |
| A: How's it goin'? | B: Jus' hasngin' in there. |
| A: How are things? | B: The usual. |
| A: How ya doin'? | B: Can't complain. |
| (43) First Part | Second Part |
| A: What time is it? | B: About eigh-thirty. |
| A: Thanks. | B: You're welcome. |
| A: Could you help me with this? | B: Sure. |

これらの例では、第2部の返答がないということが違和感を与える。Yule (*ibid*:77) は以下のように説いている。

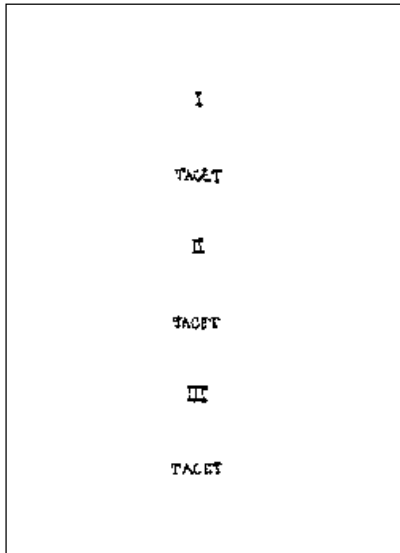
These automatic sequences are called adjacency pairs. They always consist of a first part and a second part, produced by different speakers. The utterance of a first part immediately creates an expectation of the utterance of a second part of the same pair. Failure to produce the second part in response will be treated as a significant absence and hence meaningful.

すなわち、第1部の発話がされた段階で、第2部が続くことというのは当たり前のように期待されており、逆に、第2部が存在しないことは重大な欠落が存在していることになり、それがかえって、意味深になる。

こうした隣接ペアは社会的な期待や、話し手と聞き手の共有知識などにも影響されている。そして、このような隣接ペアにおいて、何も返事がない場合は、返事がある以上のことを意味してしまうことがある。たとえば、不愉快さの伝達であったり、自分はあなたに何か積極的な選択として非社会的なことをしたいというような敵対心の表明などであったりする。音楽にも言語にも、一般的な自然の流れに反することによる効果が生まれるものであり、この「新世界」の第2楽章の終わりの部分については、「空」の概念を持ち込むことによって、強い印象を残すことに成功していると考えられる。

もう一つは、John Cage の「4分33秒」という作品である。これは、実際には4分33秒くらい演奏家がステージに出てきて、何も楽器から音を出して演奏しないという作品である。John Cage は鈴木大拙のコーンピア大学での講演を聞いていた記録もあり、禅の影響を受けていたことも考えられ、この作品では「空」が表現されているように考えられる。聴衆は、音楽が何らかの音によって場所という容器や時間という容器を満たしてくれる内容物であるかのように思っているかもしれない。しかし、ステージ上にあり、音やメロディが出てくると期待されている楽器から、実は音そのものが出てこず存在しない時、音楽はどのように構成されることになるのかということを考えさせられる。楽器からの音が期待されている中で、何も音がしない。しかし、ステージ上や会場全体で、何らかの音はしている。環境の音、沈黙の音である。音は音の無い中に生れて音として認識されているということに気づかされる。

Edition Peters から楽譜を掲載すると以下のとおりである。ここには何も音符のようなものは記されていない。Cage はもし「音を鳴らすことが音楽である」というような従来からの考え方が存在しているとすれば、それに対して新しい気付きを与えた人物であった。音は音と音を鳴らす空間という対立的な図と地の関係があって初めて、音として成り立っているのであって、それは音だけで成立している内容ではないのである。このことをケージの楽譜は示している。音のある状態と無音の状態は対立的な概念であり、その対立的な概念が二つ存在してこそ、音や音楽という状態が存在するのだということを示唆した。演奏は多くの場合ピアノを楽器とするが、演奏者は4分33秒にわたる時間、ステージ上で、ピアノの音を出したりしない。第一楽章、休



み、第二楽章、休み、第三楽章という構成になっている。

演奏者は楽章の句切れ目でステージに登場するので、楽章の句切れ目は視覚的にはわかる。しかし、ステージ上で、特に何も演奏をしない無音の音楽なのである。これは、その状態こそが音楽そのものなのであるということを説いている。この逆説的な視点が空なのではないかと考えられる。日常言語の使用においても、「無／nothingness」と「空／emptiness」の使用の動機付けに相違点が存在しているとすれば、「空」は本来存在していてほしいような望ましいモノがないことや、何らかの容器性の感じられる中に本来存在していると予測期待がされているようなモノが予測期待に反して存在していないこ

となどを表する用例が存在している。一方で、「無」はよりひろく「有る・無し」という側面に注目していると考えられるかもしれない。だからこそ、接頭辞としても「空」よりも意味的な縛りがなく、生産性や拡張性に富んでいると考えられる。禅の視点と照らすと、「無いものがある」ということを表現するとしたら、「無」というよりも「空」の方であるように見える。「有る」と「無い」を併せて、そこから始まる「(前述の意味とは違う意味の) 新しい、有る」という存在の有り方がある。そうした世界観の手掛かりとなりうるのが「無」と「空」との違いであると考えている。

V. 英語雑誌広告における具体事例

1. 広告における命令文の使用とは

広告とは、モノ売りの基本である 4P (Product, Price, Place, Promotion) のうち、Promotion に働きかける要素であり、Promotion には、広報、広告、販売促進、人的販売がある。買い手の視点からの 4C (Consumer value, Cost, Communication, Convenience) のうち、Communication に働きかけるものである。商品を認識してもらい、ニーズやウォンツを感じさせ、現実に合わせて提案をしていく一役を担うのが広告であると言える。田中・丸岡 (1991:121) は「多くの場合、広告は、直接行動に影響を与えるというよりも、ある状態 (コミュニケーション効果) を消費者の心の中に作りだし、価格やセールスプロモーションなどといった他の要因と相まって、広告主にとって望ましい行動を生起させるものである」と説いている。コミュニケーション効果とは、一連の広告活動によって広告が人の心の中に作り出すもののことである。

英語雑誌広告において、命令文の使用を見つけることは容易である。しかし、その使用は肯定文の方が否定文よりも多いことが、先行研究で報告されてきている。Leech

(1966:110-111) は、英語広告の命令文が多いことを指摘して、The very high frequency of imperatives in advertising is not a characteristic of other types of

loaded language. と述べている。そして、特定の動詞の使用頻度が高いことを指摘して、頻出動詞 3 分類を以下のように紹介した。

- (A) 製品の獲得に関する動詞 : get, buy, ask for, choose 等
- (B) 製品の消費や使用に関する動詞 : have, try, use, enjoy 等
- (C) 実物教示に関する動詞 : look, see, watch, remember, make sure, see 等

さらに、否定命令文が肯定命令文より約 50 対 1 の割合で少ないことも指摘した。そのことは、従來說かれてきた否定の、肯定に対する二次性という特性を裏付けるものである。また、近年では、鈴木 (1995:39-48) が Leech の先行研究を踏まえた上で、3 分類以外の動詞出現を指摘してきている。しかし、英語広告表現には、非命令文型も多数存在しており、その分布は多岐に渡っている。

2. “fill the void”が意味するものの位置付け

本セクションでは、以下の広告事例を分析する。この広告の中央下には、若い女性が用いるアイシャドーのパレットの写真が掲載されている。ベージュや紫など、さまざまな色合いのアイシャドーが入ったパレットである。広告の三分の二程度は文字で占められており、以下のように書かれている。

(44) My boyfriend status still says “single...”

FILL THE VOID

Lucky

SHOP, STICKER, SHARE, BUY

CHANGE THE WAY YOU SHOP THIS FALL

LUCKYMAG.COM/MYLUCKY

SEPHORA+PANTONE UNIVERSE™ ALCHEMY OF COLOR EYESHADOW PALETTE, \$34.

(LUCKYMAG.COM というショッピングサイト)

この広告には、PROMOTION という文字が最初に書かれているのだが、それは、SEPHORA+PANTONE UNIVERSE™ ALCHEMY OF COLOR EYESHADOW PALETTE, \$34. と同じ小さく薄いフォントでプリントされているため、ほとんど際立ちを与えられていない。実はこの小さく薄いプリントで記載されている情報こそが、本アイシャドーを製造している会社であり、商品名であり、値段であるのだが、この情報に対して一切の際立ちを与えられていない。代わりに、突然、My boyfriend's status still says “single...”と始まるのである。読者にとって、My boyfriend とは誰であろうかと考えると、この台詞は雑誌読者の気持ちや状況を代弁している出だしのようであることがわかってくる。この広告は、If your boyfriend's status still says “single...”と書き換えることも可能であったと思われる。しかし、your ではなく、あえて My boyfriend という表現を選択した背景には、広告が掲載されている teenVOGUE (US) という 10 代女子学生を対象としている雑誌の特徴も反映されていると考えられる。10 代女子学生はどのような心境で

teenVOGUE (US) を読んでいるか、それを予測した上での広告である。女子学生はこうした雑誌を読みながら、流行をとらえようとし、身を飾ろうとし、新しい洋服や化粧品についての情報を得、比較し、認知し、次には購入するという可能性を持った顧客である。何のために流行を捉えようとし、身を飾ろうとし、新しい洋服や化粧品についての情報を得、比較し、認知し、次には購入しようとするかは人それぞれであるが、ボーイフレンドを持ちたいという気持ちを持つ読者が潜在的に存在していることを想定しているのである。

一般に、My boyfriend's status still says "single..." という状況は普通ではない。もし、恋人がいるのにもかかわらず、その人物の（インターネット上などの）ステータス欄に "single..." と書かれているのは異常な事態である。通常、My boyfriend というものが存在するのであれば、同時に、girlfriend が対比として存在しているはずであるという一般通念がある。一人では family を構成することができないように、boyfriend というのは 2 人以上の人間の関係性の中から生まれてくる存在であって、それ単体では存在することはできない。しかし、そうした一般通念に反して、ステータス欄に "single..." と書かれていたとしたら、それは girlfriend が存在していないことを意味している。

FILL THE VOID とは直訳すると「空虚さを埋める、満たす」ということになるが、成句で「(地位などの) 欠員や空きを満たす」という意味もある。もし、成句のようにとらえれば、このアイシャドーを用いることで、より魅力的な状況となって相手に girlfriend がいるということを認識させ、その single と書かれているような状況を埋めよということである。あるいは、字義通りの意味でとらえるとすれば、そのようなことを girlfriend が述べているのを知ったときの読み手の心理的空虚さを埋めよということであり、新しいアイシャドーを用いて、新しい気持ちで lucky を手に入れるようにしたらどうかと促していると考えられる。これはアイシャドーそのものを購入することを直接に求めているのではなく、アイシャドーを一例として取り上げて、こうしたファッション関係の商品の購入するのに際して、今までショッピングモールやデパートを使っていたのだとしたら、今後はそうではなくて LUCKYMAG.COM というサイトを利用してみるように促している広告である。

この広告は命令に満ちており、読み手は FILL, SHOP, STICKER, SHARE, BUY, CHANGE 等と次々に命令される。VOID とは、この広告においては多義になっており、そのことが少なくとも二つのタイプの意味理解をする読み手を惹きつけうると考えられる。この用例は void という語の性質を活用しているからこそ成立している多義であり、これを emptiness や blank で代替させることはできない。vacancy であれば代替可能性が高まる。しかし、男女間の関係（恋愛関係、婚姻関係など）を想定した場合には、そこに法的効力の有無を背景に感じさせた方が、単なる欠員や心理的な空虚さを背景とするよりも、面白味が生じてくるとも考えられる。

こうした非明示的否定語の具体的使用例は、普段気づくことのない人間の認知のある側面を明らかにするのに有用である。人間は何らかの対象に対して、対象を認識することができる。具体的なものであったり、抽象的なものであったりするが、その対象について、なぜ認識することができるのかというと、その基盤の一つには対比の視

点があるのではないかと考えられる。「モノが有る」として何かを見るためには、モノが何かと対比されていることが必要であるかもしれない。「モノが無い」ということが「モノが有る」ことを支えている。そのことに非言語的表現として気づかせてくれる手がかりとして禅の視点と音楽作品を導入したが、特に John Cage の「4 分 33 秒」は、「モノの有る・無し」を究極的に統合した気づきであり、日常言語の分析に対する新しい世界観を提示していると考えられる。特に、本稿で扱った「無」「空」empty, blank, vacant, void 等の具体事例の背景には、常に「4 分 33 秒」に通じる認識が存在していると考えている。

VI. おわりに

こうした矛盾の統一という視点は、エリアーデの「反対物の一致 (coincidentia oppositorum/unity of opposites)」という概念を手掛かりに論じることのできるオクシモロン表現とも通じるところがある。善悪は両方あって成立しており、善だけの世界や悪だけの世界というものはない。モノを認識するときも、夜があるからこそ昼があり、闇があるからこそ光がある。反対物や、さらには単なる二項対立的分類でない差異の存在によって、モノやコトの価値や概念自体の認知が可能となっている面がある。「有と無」という対立的な概念も、実は合わせて一つの全体となりうる対象であると考えられる。また、「無」と「空」という混同されがちな概念についても、それぞれを有と照らすことによって、日常生活で見逃されがちな、「有」と「無」だけの二項対立的ではない、空という新しい世界観が示されてくるのである。日本語と英語の日常言語の「無」と「空」とその関連表現が日常言語を超えた禅の思想や音楽表現においても見られるということを導入し、広告における具体事例の位置付けを本稿で示した。

【参考文献】

- 有光奈美 (2011) 『日・英語の対比表現と否定のメカニズム—認知言語学と語用論の接点—』、開拓社
 ひろさちや (2008) 『禅を楽しむ本』、主婦と生活社
 子安増生・大平英樹 (2011) 『ミラーニューロンと<心の理論>』、新曜社
 子安増生・二宮克美 (2011) 『認知心理学』、新曜社
 正高信男・辻幸夫 (2011) 『ヒトはいかにしてことばを獲得したか』、大修館書店
 森 雄一 (2002) 「オクシモロン管見」、『成蹊國文』、No 35、pp.114-126.
 大堀壽雄 (編) (2004) 『認知コミュニケーション論』、大修館書店
 大森文子 (1994) 「オクシモロンについての一考察」、『大阪大学言語文化研究所紀要 No.20』、pp. 65-85.
 瀬戸賢一 (2010) 「レトリックと認知—オクシモロンを例にとつて」、『日本認知言語学会第 11 回大会 Conference Handbook』、pp. 271-272.
 鈴木大拙 (2006) 『禅を語る』、アートデイズ
 鈴木大拙 (1950) 『無心ということ』、大東出版社
 田中 洋・丸岡吉人 (著) 仁科貞文 (監修) (1991) 『新広告心理』、電通
 田中 洋・清水 聰 (編) (2006) 『消費者・コミュニケーション戦略』、有斐閣アルマ
 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』、くろしお出版
 Cooper, W. and J. R. Ross (1975) “World Order,” *Paper from the Parasession on Functionalism*,

- pp.63-111, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Eliade Mircea (1936) *YOGA: ESSAI SUR LES ORIGINES DE LA MYSTIQUE INDIENNE*, Paris: Guenther. (堀一郎 (監修)、立川武蔵 (訳) (1995) 『エリアーデ著作集第9巻: ヨーガ1』 『エリアーデ著作集第10巻: ヨーガ2』、せりか書房)
- Grice, Paul H. (1975) "Logic and Conversation." in Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, pp.41-58, New York: Academic Press.
- Jones, Steven (2002) *Antonymy, A corpus-based perspective*, London: Routledge.
- Jung, Carl (1964) "Approaching the unconscious," In Carl Jung (eds.) *Man and His Symbols*, London: Aldus Books.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬享三・下谷和幸 (訳) (1980) 『レトリックと人生』、大修館書店)
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image and Symbol*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 2, Stanford: Stanford University Press.
- Leech, Geoffrey (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*. London: Longman.
- Leech, Geoffrey (1974) *Semantics: The Study of meaning*. London: Penguin books.
- Yule, George (1996) *Pragmatics*, Oxford University Press.

【引用文献】

- Cage, John (1960) *4'33"*, Edition Peters.
- 全音楽譜出版社 (1956) 『アントニン・ドヴォルジヤーク 交響曲第9番 ホ短調 作品95 新世界から』.
- The British National Corpus. [BNC]

(2013年1月7日受理)